近江縣物語

卷之二

へ13
3301
2

へ13
3301
2

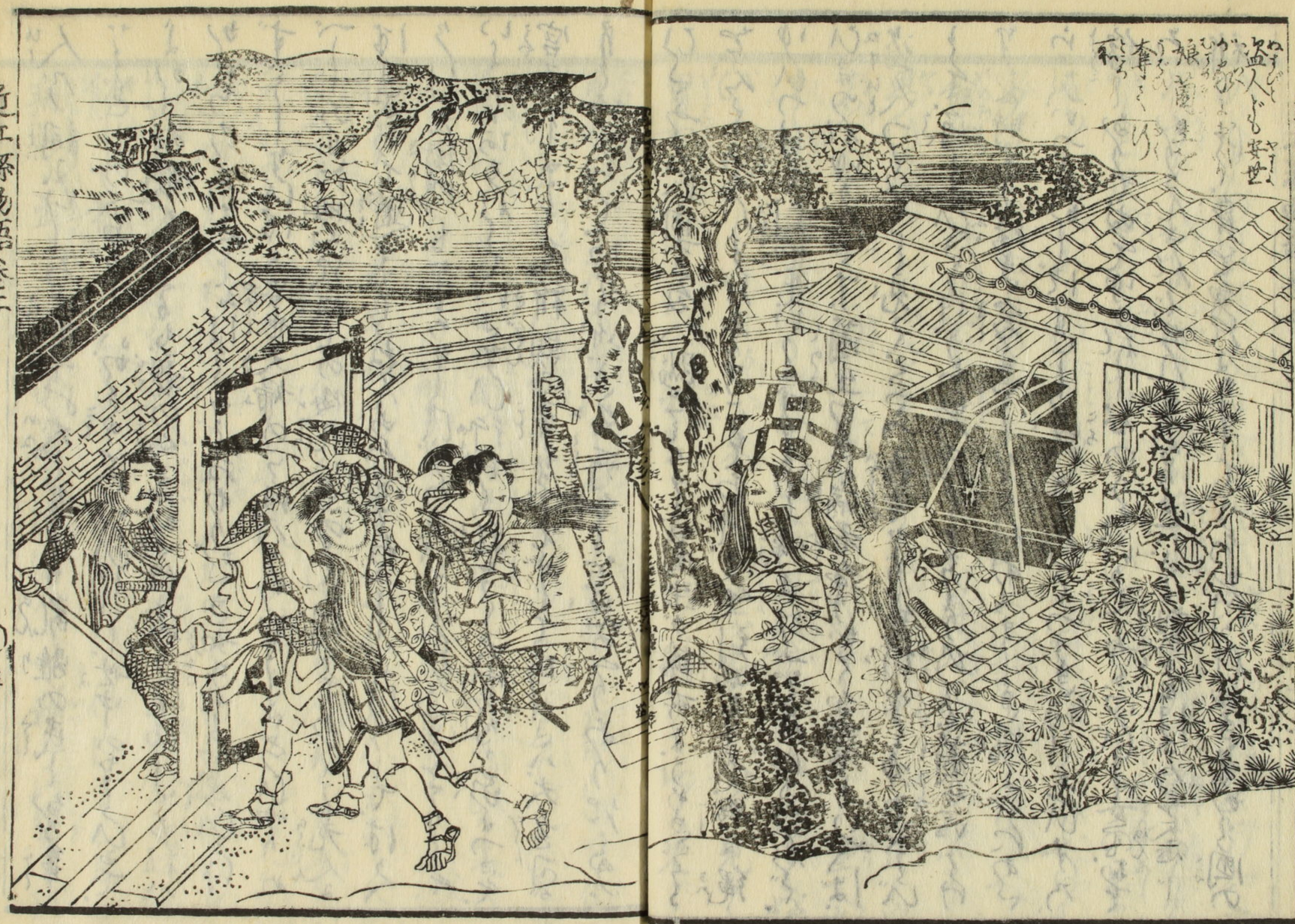
近江縣物語卷之二

くさはくらの
近江國なる橘の安世が家にては梅丸が比ひし後ハ
あるじ・妻ともに月ごとに一村俄り
ちつぎ立く伊勢の國より盗人ども多勢にて
資財道具を持ちこび子をいだき老たるを負く東西へ逃
去る安世ハ初てうり金銀の類ハ売を掘く深く埋め藏し
なくかしめ用意して置つれど俄りぬすびしれひろくく
おしかせきてときの声をあげてさつぎらしばおのもおごろ
ちよりて仁人ぜとてがよ所ハ柱つれど寡ハ銀よ敵すべ
ひらび盗人よ出あひてうすでおそんもおろくよ和ぐやわ

大正十年八月九
本大學圖書

ひとまづのがしさらんよりはまづ妻が五をとりて裏
ノ方ヘうりなげて落ゆきなば菌生ハ此時例乃屋よりなるが
かしこ思ひ思ひけるうちに外へ出るとも女の足あて
えうぐ〳〵ありむ事なるとも必ぬとびとよとらと
あらきめあやかのハまいぐでひとつの計ハ成まく〳〵
命をさとち貞をも全くかうして再夫にめぐりあハまと
思ひめぐらして文がもて重ねる藁苞の中より巴豆とゆ
苞をとり出く〳〵面うを足まてひ〳〵中ちたあ〳〵塗てその
まゝ部屋ようのたゝびて風ぬうるほちほどよ〳〵を
ひとたむしく〳〵おし来りて世が家へ入て見るに
男女一人もなくて稲かく〳〵かきたる財ちをのこらず

ひろうて奥さゝへ踏ぬきて菌生が臥所ようめきこそ
をとゝ〳〵のをとしあるこそあれとて引おこして腰の縄
ゆひつけてうしろもいるするようしゝ事さけぶを耳にもかゝぐ
ひきつれゆうんとす菌生ハ病者ありかくかせをしくば
盗人つゝぐ〳〵見くやつ病者ありゆ歩行ゆくべ〳〵
とて肩ひきうけうちかづ〳〵そうりゆる菌生いとけ
なき時より深き窓よやしなえしあるまき風よぶにあ
らぬいつきかしぢるしなるむくつるきのうえびすの
像しるりておゆうれ〳〵むのちいえうつびくもおそ
ろしりうんさしぢせんまべかるを観音ぼろと志じ
祈りき〳〵身をあるよかしてうちかづくしゆきるかゝ國の


盜人ども安堂
娘
奪ひ

人乃詞まもりろ春平は犬となるとも亂離の世しるる事なるべしとのべ給しかるに第いひけし世中のやうひやて
よかるべき娘なりるも親のかるはかるほどやうあるはあてあれハ
あさちかるべくとおほるかるぬるりがるき女子やうと思ひうけ
ずしらしはる安世夫婦のうなるの綾乃うちかるしさらひやりぬ
べしるるハ扨も扨坂上の梅丸ハそのまゝ川みてあひうる老人な
はるべきちて道すがらねんかるまうちしてはく
なるハ左衛門もなるめかるしかるこびてされ人とえうるそ
いよくのちなるていざなひ行けるる祖父なるく大宮司が家へつきて
宮居すまして祈願の事なるべてなるてハ大宮司が
りてなるちて行うり近き名所なるくと見めぐりあり沈るの

暮わたりがうさむ乃里にて宿りるる其夜うり左衛門はいつ例なら
らびして寺臥乃しハ出ちもるべらて追留るてやまひを我
養ひぬるりるる一日左衛門梅丸を枕りるて呼ていひるハねて
語りるるとくおのれ嚢子なるしうちはけるる事なるられ迎乃
猶子と成て元夫が終りとも見んとけてれいるれどあいるに對
面るてりひさすしるつりさそひるくと人のやうなハ思ていて
これもすくせの約束るとそて涙をおるしていへて梅丸も共る
袖をぬるくるて暮まし仰を浮りぬたのひるるあき孤獨の身を
いたとりあげさせるひて御姓をえ機しまるんこて心肝を
絶じて有がくるて出へといへて左衛門うしげるうちるるく
病休よ盃とりるせてかるみる酒汲うて親子よ勢りて

なりゐ、かくひきもうひちるほどづゝ〳〵なりゐれば、はぐ
ちゐまゝにおけくる田楽のつきなしおこるひて見すれば、
左衛門興に入ものしろりて、日く催しつゝ此事式なりさせ
ろり、左衛門やくちちさややぎる沈日ケしてなわくもく
門をくく音ちけきバ明ていくく見るに京よりし家司
なり、兵庫寮ゆで有けゐ左衛門ゆうり、あかきぞうつ一くく
召入くいるに、何事にくちりつるぞと之バ兵藤声をあげて
希有の珍事いでくくるぞいまづゆへもうんハ奥方ハ
盗人ものゆ殺されのひもをやといひもあへぞうつぶしに
ふしてなくと左衛門いくく事の子細うけしとせれ角
兵藤同ゆしぬぐひて云ゐハ君の下ぐせゆひて後我ともぐ

畳夜をさらびれたちの肉を守り山系出ナちりよ粥をゆし
清水の御寺にたやしいあとふて祝ゆる色ゆうぬひびとた
二十騎ばりゆしいり物ども奪ひく狼藉よ及びゆを弟
黨ども三世尼戦ひ〳〵ども〳〵ゆうくもゆうひ男女をちりぐ
り逃せてゆひき某祝あけく帰りつきてゆるに、ちや海
たちハ火をつけく焼失ひぬすびとたハ少くもちびちゆ
海りにたちの後なる藪の中よりうすきむくろのうて
ゆをとくくうたしバ方ゆて有ちまゞ〳〵もあるぬ
着なるしゆるひちぶのちゆ衣きておちくまゆりゆ遁
ども財乃有所ともひ奉行るとけ〳〵なハぢりりゆ粮
奉りくりとおばんゆしゆ〳〵ちゆ大事いできとり

左衛門稚丸をたづねつるとあり郎等どもこのきくうる
計べ左衛門殿おぼえ給へて命をこ盗人のうち失
はるいとくやしさよりほどなくいとゆかしくもひるる都いうに
とこゝで兵藤都も同じく盗人ども入りて根葉いしい
うしかし先ゝ大事と告をんとそいとぎ罷下りゆへ
都の事いとくもほりやさびとりつ左衛門つし仕をやうて
うり二十年に成りぬさんどかどうの大事をよう見ん
道理なし今ゝうり都よ帰りのぼり光弘ほうちう式
合せ帝都を守護し奉らんとる用意せよとしつを
兵藤おしとゞめて伊勢近江よ出せる盗人ども何萬騎
とりく數もうしさんとばかけやゞりて通ゝんとかるべゝ

ゝく思慮とめゝゝ郎等どもく
かく旅乃空よりて物の具をゞに用意せゞしだ歌よ
向ゝ人事計なきに怪ゝ思ゝて
都のやうをも聞せうゝし諫めれどちゝそゞちゝ
とゞ留りぬかく物忘なる時なりけ山ハ街道ふも人の往来
たゝて都乃おとゞ歩きるべきさまし左衛門云けるハ
いうでるへきをはうて都のをを問せをやとゝ
ゝりたゝをうのぼせつをゝべきとゝ郎ゝるとり用と
用ゝ見あをせうのをゝ行んとゝ者もなゝ
梅丸すゝ出ゝ某ゆきて都のををもうゞひて帰り
ゝのゝゝゝゝ左衛門乱軍の中存亡おぼへゝ

梅丸
左衆門
都へ
のがれ
明不

無用なりとて笑はれど梅九あるがちよいしるの某氏
のぼるんふ必定つかいまりきくべくひんやもうし
といふ法澤門さまざとてたがねつまたる袋とり出て
何ゝ安世どのとやうんも恩ある師なりもやけばつく
かるくおそやいついでよあるう尋てあるこがほうこう
せば知ごこのうん日比をふともうこうこ必是あひて
来よといふ梅九をれうり旅ゝとひあて扱乃明をあく
はかしこを出く都をさしてのぼりるちくねだに
旅ふうきくなるひるなかくく盗人どもの山野よりて
ある時なれば行きくするの人もちびくねすごき
事いでちくありたくをくる乾飯をふよそぎあ

食とあしく扱ハのれる社ごよやどりつかうじて
美濃國某の郡にで暮かりそしがいづ
こにやどらまとと見るすよ森のけよ大なる寺こと
りれどうしくていそだ門よ入く見るよ僧ごハ見え
ず髭ひ眼ぜるしき男どものいかしき太刀ひと
たくふるがいくくとなくあかーこよもをあり梅九と
見るうりはくくとりきて太刀よをうけておのれ
何者でといふ聲つきぐねのひぐくよいとるびさそハ
ぬすびとの住どころとんづきりて手をつきておのれ
尾張の國すする田舎ものいひて都よをぢある者のひて
やまひる物ひていとありてあのぐくんずる有日の言て

りへで宿りとらぼやし存りて思ひ〳〵もいとけりてい
なりしれゆるしを蒙りて帰りたるといへだぬすへうち
守りんく〳〵たちかくる者を向ひて やつハ田楽を
ひさとするとや こゝひの宴席よハこれよりまたるれハ
めし入くあやくるる人よ告ゆてんといへハそれかうり
きけこちこといして縁のくよのぼせつ梅九うち見まハせ
に鞘をとゞしる鉾長カ命どあまりうけかぐう
盗く取る物とうんく皮竜代長やくの物もつのうさつを
かゝべしあり かりひけぎをきに竹裏ことを飯りあるとて
来くくをつおぐしを頭て奥の方へ誘ひて入て見を
れハ横坐て賊魁とおぼしくてぎくつきぶけるが

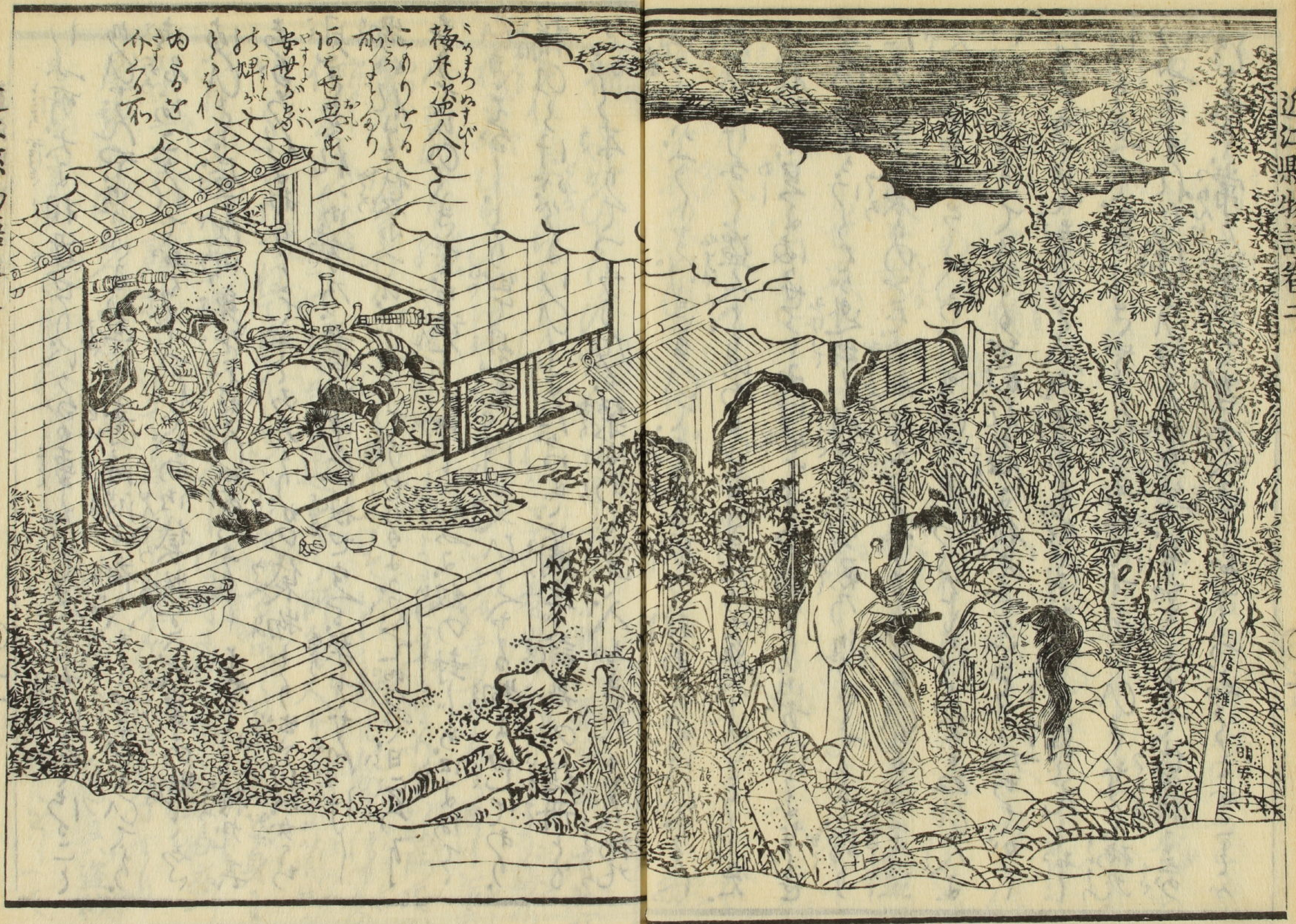
苗
ちとねよ祝まりてをりそのやうたけ高くやをろしげるとの
ぶも左右よりくびく酒のくをり 梅九一禮して坐しけるハ
横坐なるあひびしうちえくきをけるる若者く田楽よハおふ
そのそなをとりかくなるあひびいさくしびてさくくと
いひたくぬすをりくる笛数すくをり出ておりひくくうち
をやを梅九いるむべきよなくねハ扇をりてたちあぐりて舞
かくくくくひるハ
枝さしかを波磯の手門をぐりのをやくうげあう
風吹あくタぐれハちく波たくをぐすをを
をれくくまひうあでけをハありとなるあひくもあく
なげておれいをぐくも舞てるるかをもれ上手にをを

とほのもく〻をこたれて興ずるり此筆のおりしたあや
めでけんいつく〻をひもとさるぬしひとのもちはひつ立あがりて
ぬるもびく〻嵐ハ三輪の神とおもひくて、そぐ巻のいと
のひくもぢよりをの〻をたの〻免
とうひてそぐつよ筆るわらえ面を燈臺よひきうけて横
さ面ー・たれてーてりぬひとぐもぐ〻ひてけてく
つ結き筆でうかぐめのふハ恨もつうざりしひつ・ま見と
りてかきけぐーつ撲庭乃ぬまくへ沈く極丸をほりてひ
きるハ汝京ーのぼ〻んずるふハ我ともぐ〻面〻よありて道を
ふさぐてあれバやもく〻とほりゆんと、ふ〻ひのむきで
物ーおきをつをひくて焼ちうおーうるちひさきれを

なげ出ーつ・ちを」ハ我〻未もがらの割符じさし持てとほんん
ーハいづくよ行ても汝よまざもりのハあ〻沈とひ心極丸手よ
ちりなげてかる時よハ秋よまりたる出面物もふらち沈
ちそぐぐきてぐちをつをぬさて酒宴も華ちてく
ぬすびくぐおの〻臥面よ入く臥ぬ極丸もりやの方ま出く
寝ちりしどいもわくれ孫ぐ起らぐ〻戸乃方よ出るふたる
かる女乃泣聲の少ゆしだのやーくて何をんとうがひ高
ー・ちりくぐ九日ぐまちの月をあやうんさー出て物の面ぐおぐ
屋うに見ゆをハかの聲するかくをたどりつ〻ゆくて堂乃
うちつくあちりて樹ども物ひちげりる所ありてかくハ墓
所あり物すごき事いちんくるかー入て見をハ女のうち表

いよ〳〵高く聞ゆ。死人のまくらもとより石などなげつけ、こぶしをにぎり、路をとり、死に、聲するかたをもう見れば、たちの樹、多くとり置くなり。計なる女、ひとりぐらかなりて、けりいとかなる人をしこそだ。女ありてそをなげて、ねるすこしおぼえるおもてをしば猫ちらしたる。安世が家よりつかれしあそぎ、いとしい、嬋ゐど有るる。花どもきて、いとかくるあれ見るそどいへど、女も鼾をあげて、梅丸君よりそおたしたる。吾をもとらせとり、梅丸、だと高し、声かなりて定めて、わす人よりとらもしやるべしとて、いまも解てかくよりなる衣をとりて、うちきせて、この子細ひそうよ語べしとくだ。女涙を拭ついひるはづきこの。ゆくへかく成まひみ、後。

御菌生
〳〵はづくきまひて床より臥て起あがりのはづ、ふるに。
思ひがけなく、盗人どものあるらしかりきたりてゆへばのそこ、死。
ひれて、見るはあるせく、あげ出てさつ姫なりは、出方はいるなりせ
のひしまうつとが逃出し、時すでにはづ、ぬろ、はるさしとて、贈り
たまひし、袋のをでは肌をるるさずりさせるひるが一定逗
人のさそよくられるひつんづもいくるぬひ人よ。
いけどもてゆかるをかれが心よ従たざるこだちてがく
いまもてゆへおそくは方ふもかくるわをや足ぶんとおし
はくりゆへだかかーさやーん方もねえず、といひくかく梅丸
いぶーりしむ、ひとひけは菌生は吾をとらて、袋物よ三の
ぬきくく常人を以て吾方へ返しおつ、ふるるおこしが


梅丸盗人の
こもりゐたる
所をとめり
安世が
とられ
さがす

い小所、大よ相違せり、いかなる事でしこへ、女いうぞちること
りひちんやはるるよ色〜青海波の夜りいま〜せさせのへてう、
はんのこがれてかうつしたがのち袋物をば大事の物とあく
はひく、昼夜はん身をそなちせのはぎり〜をとしく梅九其
あるうちなるありとてとうるうり、かの袋物とり生しば女ちち
見くそれはは方乃書の中に挾せるる栞とながけ〜
物いれる袋ゆへいかゆ〜てうせるるようんていつで日ろり
ありていひきて、はは詫じゆへとしかる紙の封じめはなのて
ひきとるーとり出て見ばは内よは又ひとくはる物ゆ包てあり、
横ひらけばぐよりひーまたがつぶ菌生が詠哥の短冊とも
をかく〜本りてつくりたる栞なあをせて入ちきたるなり、梅九

横うくがひらけば常人が持きくうし、梅の哥を出して見せ
ろしも女うちうるひくそしいこその春常人のりしうり、梅乃
枝よみもびつけてもくつ〜こと紙書てよあくせ〜
乃むびうり強く返〜やるーてようませるるなりとしはてい
常人がたくそくらひる事ふそ〜しに親したのくはる人の
仰そいり都へのぼるあり、道もうし師なる人なくびよ菌生が
ゆくへもたづねて見んといくだ女はは方はるくこの品を身よ
つけて持ておくせばそしはをるるに尋させくしはは仏えつ
かの一品を證據くして尋ねて見んがいとはは今ゆうり
尾張の國あつくをさしてゆくべーたしうの白くよは盗賊
もつくざるばは心やもうなべ〜くいそぎ物せよとを一て、

たゞね元出く手につゝ竹垣をおし破り女ゞ手をとり
手引つゞし道を教ておとゝやりつゞしも爰よりてい
こしのあなもづゝかんとてやゞてすゞ笠ちらゞり すそ
引つゝげて都の方へとぞいそぎ行る

○山のとね

ゝに夜叉丸しゝぬすびとゝなり 袴ぶくゞ羽羽織とたのゝ
たる者ゝなりる 近江國よりて大寺の法師ゞらを追出し
ゝゞかゝそいのわゝゞし成てあまゝの盗人をゝゞ錦緋乃
ちとねよ座し山海乃珍味をあつめ ほゝきあてにとりてそ
住ゝゝりる ゝゝひ像よせる女ゞらを庭よすもあゝべて 夜叉
丸縁よ出くあゝゝある中に 光ゝぶありる姫あゝゝをつけて

何者そとゝゝゞ姫泪をゝゞして ゞゝゝゝ山城のくにのかゝね
ゝに住る者ゝてゝゝから歳ゝけてゆゝゞ命も伺ゝをくれゝん
くゝいにもゝゝゝせゝひねゝゝゝ夜叉丸おのれたくゝを持る
ゝゝゝゝゞゞゝゝゝゝゞ置ゝるゞとゝゝゝゝゞ世をいとひ
はゝゝゝひてゝる山里よ住ゝ方乃ゝゝゞふたゝゝをゝくゝゞき
といゝゝ夜叉丸姫ゞゝゝを見るにあゝゝる布乃衣きゝ
をれば此姫人ゞゝはゝてゝ見ゆゞゞ衣をゝれゝゝゝゝとの
こ見ゝゝゝくやつもゆゝゝゝ者ゝゝゝゝ

口おほきく、鼻の穴ハそらさまに向ひて、髪ぢりなる見ぐるしき男やうらいうごきいろぶのうすあをみてあり、れば、つき女ありしが、大よろこびてさるのいくで見せぢりしごくひきいぐせといひつけやるやどねて来る女をとれば白きあやの衣うさねてうえぎにハ桃色のいろのつりぎぬはやうなれば、着て人ごろあてるるが、袖ハ涙よぬれひしをしてなるよくとそ。いできうりうなん安世ぶむをの蘭生あてあるる顔ハ足るどの腫てえゆるハ盗人よ手ちせど乃計ごあてずべく身のうちよ巴豆をおしぬりしばがくあやしき病者のさまといふ成るなり夜又九ちるるうりけふ常ふあるぬかるちかれとてそのよ延ばくたりとりてがーらをあげ

よとしいひくうりあだるを見をばおりてのかるに腫ぬうりたゆげなるさまにいきたるがれを病者しとりふかく面の腫るをいかるうりハ何だるのいとむもにのード日ごろへばやがて愈ぬべし此女人まうりつるひべるーびーびーぶ置て我るそらはのさばわーしをりひるん先ぶーにのぼせよとりひて縁よのぼせすりくりてだをしかるやう女一ーすげる声ちくーうづうくハいとやりやまひまかりてさるふけやまひちづきるる人まうりてうたやえるるうびおすりへるりのひそといへを。なすぐふちるるとうたんうーやかーうりたんもうーかーどこいひくひきいせるーつとりづーく女あぶくーしぬをんあぶにかそちずばいやう舟のとりひてにおほへで夜又九ハうく心ちるく。

あましひ飛で大空をとりけるもちもちあたくいとくぶ鞠ごうが
涙やうなる鼻息してなんとくとくしひくずりうしむ
菌生ふしろの肉ちりかの巴豆を取出しふづろひとうに
あぎりあるをさても此手のうけてちよといひく舌を出て
こいねぶりておれらまやく茸露もかくこそどりひたもし
て牧ねんごろよねぶりをとりて人をもちぐびひざの上す
ぐれのすしが菌生人とて見さとてかしのるやうなして
両手に夜叉丸がつくをおさえくかの巴豆をおしぬりく
すりおのれを生ぶしりひくもとびて云るはぶふり
此女人我つぬくしちぐちん盃りてちやちどよだろうてろう
ちげて二つうつのて服息よりあてひくくと菌生ぶ顔

を守りつめてあるが俄よつくをちちちたおさえてあな
たへぐうしのくるのおりてちうのりくむそだのれりくくして豆
ちのぐりて腰をうぐめて女よ向ひてちぐこてわれけ豆剛よ行て
ちんとて物さわぐく奥さ向へちり入ぬ菌生ハ物をちしま
中にもさすがにをくくてひとくなさぜ内ちる見する
なうとおりひくんのうちよ佛神を念ぬうり夜叉丸ふ
たびもきているるふう俄よ痢病といふやまひよりたり
部等どもくく殿西邸下ひきてしもくんハ我此痢病
をいやくちるはハ女人乃瞳るやまひ治させちんやちよ
部等どもとぐど一人のぬすびとすく出て夜叉丸ふ
見あげて敬馬くあれ見くく人く我親ぐこのうちの俄よ瞳

ふくれて見ゆるを、といだせるとびのるぬけ人どもうちあて、
をとつるへ出ひ夜叉丸手をあげて、おのが面をちぎり、又手を
うちくしく見てさてくしいひく聲うちあげて手さく
あるうにをれつるあり此やまひ人へようるかしし女ゞ告うしい
誠なりうそやくもかうざゆゑ我ハようきりぬる事よといひ
南ゝ手あてをうちちなくわいやくたるのうちなる男の
五臓六腑をことゞく〳〵ちひさいすゝにかひるをあをゝ
くしくふるへ剛よのぼりてんとてもうへしばなるとびぬ
ぬるぬけ人どもかつるへうちたちて此女やいちごまやまひ
を我ゝやゞをにうつしたくかのれいらしまし悪人なりあどりよ
ほど夜叉丸犬のあるくやくにさるびをちひとこうひをきて

もうれきこゝをねーてぬけひと共よ向ひて云るハつれしかゝ
ゝのあるいよかゝびなれ英勇しほとれうしうとだゞはゞさ
なびむうり潟しるにたちまちうとせの翁とありにうどひ
ゝ大息つきて今ハせんくしかし我此女と縁かきあんかり
とくゝ彼をそゞきれ姫しりあれよ多襄丸が陣よおりたら
ハーて責ひるすべき女ゞうち中に入かくべし又ひ我まゝよ
かいゞしてあしくゝ又ちまきかくるよちうのいくむあ又剛よ
ゆんずるゞんくゝりてたをけよして郎等どもの肩よ手を
かけてやゝ多くに立あゞりけるがほとれあをたれ力
山をぬき氣世を蓋ひうしもかれ時ハいうせんとて女ら
かゝをうち見やりて汝をいんと汝をいんといひてゞをて

強盜夜叉丸
薗生ごろう
妻よせんと
りよ和

げよ。おり見返りつゝかづらして奥のくゞみぞ入るのぬりる盗人ら
菌生をひつさうてがの焉うこめやきたるひとやの戸をひゝきて
おしいれ鍵さしてそ知ゆきるる菌生身のあぢきなさ思ひ
つゞけくさめくとなれねるを嫗すゝりてなぐさめるを。
ゐどてさハかげきのつきゐほどく姫人の妻と成ふふ
べきぬさいをひよ免きのひつうきゞ中のうらびとハおぼさ
ずやといくで菌生や頭をにのけているるはくしハたるまゐ
ゐもねどねんごろとそせのつうゐたるそといふすきハ嫗おも
とにいらくつよりなくせを親さちハおらゝ由もや男りちまり
やしとそハ菌生涙を拭ふゝるやもさひゝ又夫と定りたる
人もゆひつれどいまゞ枕をゞたかゝちで行ゐしてたり所も

ありねんびしいくでおとしの事やそも住めひゝ一和いづくでし
阿ゝ神崎の里しるくゝ泣いづゝ嫗脊をかでさすりゐ。
ゐくとそも橋の身にくくたりくゝ事ハかもねどいのまりに
ゐくたれバむろゆくかぎろいうちろうまあくゝせんこうづく
ゐのほせといくで菌生手をあをてなゝ嫗さてもいうなる
事にくゝかるやすひよハかるめうひゝしとそをいさや盗人ら
せわるゝくゝきてちりくしおりひわゞゝしていうでもを
汚さびして天わもめゞりあをるんと思ふり。はるりそ式
まゝけてかゝ病者のかゝちとありてひしとのあくハしく
物語ゐるれど嫗手をゝちてがゝとのうちひやりとの
やう形るんゞくハ女よハたゝしいゐゝゞとそ嫗も又身のうくを。

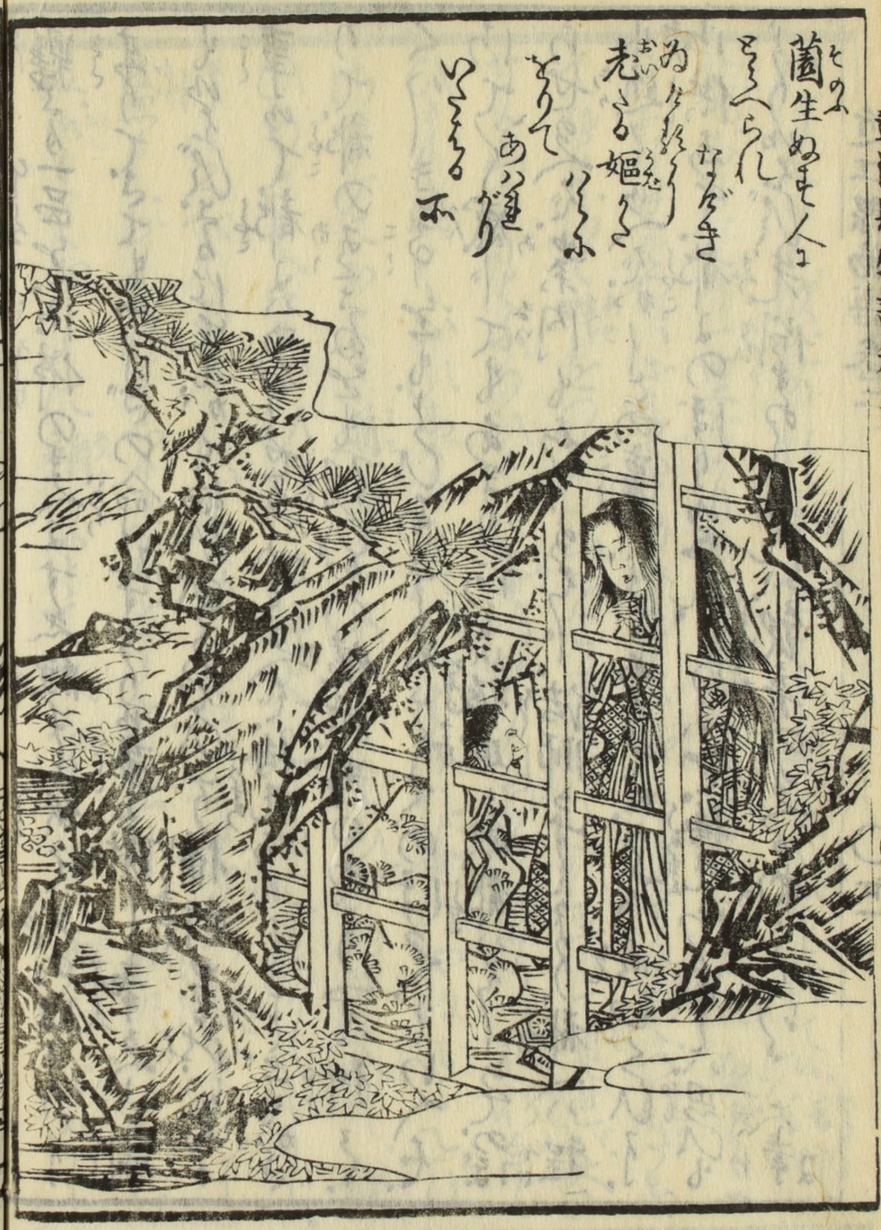
語り出んとする所に盗人多く戸をおし引き来りて親らの仰ぎ奉りをば多襄丸どの〳〵陣へおくりつかまつりて姫をも薄生をもひつさげて出行る此人〳〵の身のゆくすゑハ後くの巻にかきつくべし扨かの梅丸ハ山くて近江の国なる大野にさすらふるに松うげよりつゝく来られたるひとりの法師をとらへて物うたんとすれ両人なりしびのそひとりの法師手をすりて御佛も照覧あれ出家ものもたくさんぬすびし此先法師みてゆるさせたまへとゆるしけひらけひらぎのしらびをかけるものをそなのやしけるそれおしてたゞせよとりよ

法師おしれハ観世音ゆたびつる物ゆへ〳〵ふかくをさめて人にも見せぬたくさん置る物ゆへ法覚ぜんハやすきこと〳〵とゆへ〳〵こやつをそげよりよりそいちぢやうたるうハきはすりうしおのれ出さずばやる物ゆへんとそなぐきかひきぬ切て法師ゆめさきへつきたるをさとひ命ハやる陶ゆも此ひと品ハ見せまゐらせじといかし命にうへてそとりよやるもしバいうぐき物ゆるべし息のねとめてんとそかりあぐるを梅丸いとほしと思ひて声うけて松うげうをそぐり出るをおひとと見て出さうつるゆるにちまうけセバひとゆかようけて此世のいとゆうせんとゆへ〳〵梅丸ゆとゆうり焼ぎうおしたる害符

とり出て、ぬすびとがまへ、おかけ、まきて、云るハ、おのれハ、様ゞ、の
君よつうまつる、今まのあたりにて、吾君の、仏仰せよハ、我陣中、物
かく人、すくなくて、いとたゞびさべき法師あらぢ、おてきゝ、と
のゝ、よつきて、おのもこゝかしこ、捜しとめ、ゞ、青くの法
師、ゞ、ゞ、迷うせて、一人もある事なし、此法師が、ゞ、涙
物書、ゞ、ゞ、れ、ひきつれて、ゞ、と、ゞ、て、罷つ
て、ゞ、ゞ、両人のぬびとめを、見あを、せて、さてゞ
梯、梁、ゞ、の人、そこ、有、ゞ、ゞ、ゞ、おてあを、せて、
刀を、納、ゞ、れ、ば、梅丸、ゞ、ゞ、て、法師が、手を、ゞ、て、引
たつ、ゞ、法師、ゞ、ゞ、ゞ、て、足、ゞ、ず、梅丸、ゞ、ざと
ゞ、ゞ、ゞ、

おぼえいとゞたのもしく西念とゝ世すてびとにて法師が
菴おを一里ばかりゆくに見へ奉りてこゝに一夜とゞめ
まゐらせやいざなへとりまさばかなはせんとそつれづれ
てゆくに山をこえてかゝに至りて見るに大き
なる山のもとふちひさき庵つくりてあり。たゝうハ松杉ゐじ
ひまもれくおしあゞりうしろハ菴のやねもうゝ淀
ちすゞにわをきき道あるをめぐりてひりの方へ入て鎖
ひらきてこもるひゝる法師火をうちてこなつ
まゝうべてあるゝにさてひえ物をたまる変乃飯を椀に
盛つくむし物よこたる茶をすゝて出しつ梅丸おもしろけ
なる物にて頂りぬとて仮ゐるゝをとり西念ハ首を

懸る一品を侍佛のまへよすゝ經ゝ紙て火のほとり行
まりてさてもかゝりの命たすけうの事謝し奉るべき詞
もゆゝびさるにてもかくぬひびをめゝびこり横行せるいとゞ
事ゆて都よハのゞゝせのゝとゝへ梅丸ゐりしゝとゞもかゝ
りて都のゐさゐをも伺ひかゝ嵯峨野のあゝりゝも行ゝ
くりきるをもとひあきゝめさゝてのぼるゝとりくゞ
ちてゝ感ゞてもあまりゐるゐ振廻ゐれ都ハそゝてのぼ
らせのゝを紫閉もありゝ。法師ゝすゝゝゝり都ハ程
も近くゝゝゝゝ。この事ハゝゝゝ
出供ゝて都よのぼりゝゝ
らりゝゝゝ先問ゝゝゝ


苔生ぬまで人こ
そなへらし
なげき
ぬるまでうたた
老る姫ぞ
そりてあはれ
いとゝる不

志のあつかいなる物あそびうとゝで法師水晶の玉の数珠
涙をながしくし流して、おのれいつき法ハあゝぬひづつぎ去
て、世をいとりゆゝ思さぶるゝ觀音の夢よ入のひく
かの一品をえてゝりんをあゝた免く今ハ隨分乃修行
者と成てゆゝしいなゝ物語ふてゝ又こゝを出て
ゆくあちこちゝ山ゝやをませのゝとて枕とり
出てうすゝるゝ敵ず函ゝてうちきせ法師もかゝちに
ゝりてふしぬおくで俗とくゝまゝりて出こんこすゝ
法師もゝ〻ゝ流うゝひするをとゝむれで竹ゝび梅九ず
ひきをひゝゝちゝ出ぬたすゝ盗人どもの居あつまる所
この日ゝかの燒きゝのれ出して見せつゝとなゝこほりて

都ゝを着ゝる都ゝハつゝゝ武士ども昼夜をこゝゝゝ
增いやいちゝきて用心嚴重なれどさすゝぬすびと
どもゝこゝひりとゝずゝゝのくゝあゝりに行ゝりてゝるに家居ハえ
えゝ盗人どもゝ火をゝるちゝるゝ竹ゝ野と
成て物ゝゝゝべきゝゝゝんゝゝゝとゝくゝちゝゝゝひゝゝる
夕暮のほゝゝ七十計の白羽扶はすゝりたるゝきゝひゝゝ
梅九聲をゝけていゝゝ老人嵯峨の左衛門どのゝゝゝの
踊ハいづくゝゝゝゝ老人つゝゝゝと見て見ゝれまゝゝ
せゝゝ人のゝゝゝゝをとゝゝゝいゝゝゝ人ゝゝゝゝゝゝゝゝ
左衛門殿のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
仏羽ハむゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

あて常にさち入てゆくを見るに、ふくろのうへに、
ちいさきくるを出あひたり。われの方へいるべしとて、
翁おそれて、ねんぶつ人のれうとして持りて、
はうらいかしこの葬をげ、葬てのち、ふとりひろ
入てえんをかくだりをも塔婆をたてあり。うち見るに、光
徳ぐもりてくさてもたゝつどのハ仁徳をもとし人みそなはし
たゝその法華と罷ゆる人のかくおもひ、
し事おげきてもこのまりありとてひしふしてやみぬ
おしもせだ西人ハ火うちうち出くたゝ紙なる香うゑくゆ
らしふとゞうつゝもぐく衣の袖をたゞちばりなる法花者人
ゆ人むりしくばきちに入者りしねんぶつの名をたゞきあり

きりやとゝ人で老人うぎにその名をきりてい子細ハ其夜
翁脊門のうゝ俄よ物さつぐくいひつれバ、なるこてをして
出てえんゆへハ鞍おきうる馬のくちとりていうき男の立
ておのれをていふ咲馬よるねすべきまやあるとやうあ
ゆへ忘おそろしさに刈とりる草どもとり出てつゝうて出バ
又源あゝバいづせとやてゆぜんうなく神よ奉り生れ
親子をおろして出してゆへ親子のさ犯を我口よあ
てゝくくしのこほして息きれて衛みりしがすかし
ちわやぎぬと申て馬乃草をもわどすのこる尻うけてで
ゆひしかれが申てゆハいよひ我ともゝ出ての左衛門とう
ふある者の家ようち入て寝どるうぎひて今ゆ人とする

かゝる時よハ海くがだと紀まづしき物をさいをひなまぬ
うれくなりしてひてやはうちきくすり胸おどろきて我
むをもの事きづかハしくて人をろーをうやと問て
ゆへだぐ女一人ころしつとやすいよくんなるべいうなる
女をころしのひつやといへで老うる女ありきつが主の商
先どのく寶のあり所せわ問のくだいくをぐたせざるだ
りう返りてさぬくのくちうれだかいやつとてかーらら
おとくのうきかのたぬつが妻あどあやきうるねあぐも
りくらハあくざりきとやすくく馬ひきてゆけりてゆひし
ちて我妻の姫をもおこーてやきくんもなくおて
ゆひしよくちのたうに火いできて一時計ゐて家づ

ゆりてはひきつとらて奉りて見ゆハ法家の人くかくあつまり
て歌うをぐたくにをうにりて奉りき我もまハいうよ歌ふ
なるやハ其夜ゆくくあくくて成ていし語もあぐ奉りを
ゆげて遠くはてハ方をころしたるぬすハ斎光よて者
者けかれ人ハ高崎に柵つくりて大軍まて籠り
をれぐたやもく討うべきあるべいうで計策をな
へて亡ぼさだやし思ひるさて親族の人くハいうよ
ちをこれハ皆都の中にすませをり都ぶり光あ
そんの守をせをくだそれよおちて如人ども入きくう
ぢ」ハるつがくおちて其夜ハかの
籠がりて者りて おそれぐ都に入てとのあるうく見

とりつ。此ものでに。安世君。薗生の方より。出ゆくへを尋ねさせ給へと。西念がすゝめる後ひて。又近江乃方へと立ちいでゝ

近江縣物語卷之二終